

アンヌ・エベールが描くケベック女性： 生誕 100 周年を記念して

Québécois Women as Depicted by Anne Hébert : In Celebration of the Centenary of Her Birth

小倉和子
OGURA Kazuko

 **Key words:** アンヌ・エベール、ケベック社会、出版事情、女性、解放
Anne Hébert, Québécois society, publishing circumstances,
women, emancipation

Abstract

Poet, novelist and screenwriter Anne Hébert (1916-2000) has never ceased to affirm her feminine visions of Québécois society in the twentieth century. She is also one of the first Québécois writers who, through the publication of her works at a Parisian publisher, had managed to garner a wide readership throughout the world. Hébert's female characters, who lived while keeping secret their desire to free themselves from conventional society, were often the subject of feminist criticism. In celebration of the centenary of her birth in 2016, this paper revisits some of Hébert's major texts, such as a poem from *Le Tombeau des rois* (1953), and the novels *Le Torrent* (1950), *Les Chambres de bois* (1958), *Kamouraska* (1970). These works reflect how Hébert, through her pen and her imagination rather than by political or social discourse, sought to emancipate Québécois women, if not the whole of the society in which they lived.

1. はじめに

アンヌ・エベール (Anne Hébert, 1916-2000) は詩人、小説家、シナリオライターとして、女性の視点から社会に発信し続けた、20世紀ケベックを代表する作家である。その作品の多くがパリの出版社から出版されることにより、世界中に読者を得ると同時に、ケベックでの評価も高まった。カトリックの伝統色の強い因習的なケベック社会の中で解放への欲求を秘めながら生きる女性の内面を掘り下げたそれらの作品は、語りの構造など文学的手法の観点からだけでなく、フェミニズムの観点から批評されることも多かった¹⁾。

一昨年 (2016年) は彼女の生誕100周年という節目にあっていた。ケベック内外でエベールを回顧するさまざまな行事が行われたが²⁾、筆者もこの機会に、詩集『王たちの墓』(1953) や、『激流』(1950)、『木の部屋』(1958)、『カムラスカ』(1970) といった小説群を読み直しながら、政治や社会への直接的な発言とは別のかたちで、すなわちペンと想像力によって、ケベック女性、ひいてはケベック社会全体の解放を模索した作家としてのエベールの姿を浮き彫りにしたい³⁾。

2. エベールの経歴

具体的な作品の読解に入るまえにまず、日本では残念ながら十分紹介されているとはいいがたいこの作家の経歴について、出版関係の年譜を中心に簡単に紹介しておきたい⁴⁾。

エベールは1916年、ケベック市から40キロほど北西に位置するサント＝カトリーヌ＝ド＝フォサンボー (Sainte-Catherine-de-Fossambault) という町で5人兄弟の長女として生まれ、2000年にモンレアルで亡くなった。父親はアカディア人⁵⁾ で、州政府の役人。彼自身も詩人であり、批評家だった。母方のほうは、両親とも由緒ある家柄の出身で、父親はカムラスカ領主の血を引き、母親はサント＝カトリーヌ＝ド＝フォサンボーの領主の子孫で、詩人として有名なエクトール・ド・サン＝ドニ・ガルノー (Hector de Saint-Denys Garneau, 1912-1943)、さらに遡って、フランス系カナダの最初の本格的な『カナダ史』(1845-1852) の著者であるフランソワ＝グザヴィエ・ガルノー (François-Xavier Garneau, 1809-1866) と血縁だった。

まず1942年、詩集『釣り合った夢』をモンレアルのアルブル社から出版し、ダヴィッド賞⁶⁾ を受賞する。1950年にはこの賞金を使って中編小説集『激流』をモンレアルのポーシュマン社から自費出版する。20世紀前半のフランス系カナダはペンだけで生計を立てるのは容易ではなく、エベールもタイピストをしたり、ラジオ・カナダのための原稿を書いたり、のちには国立映画制作庁 (Office national du film) でシナリオライターとして働いたりしながら創作活動を続けていた。

1953年、2番目の詩集『王たちの墓』を自費出版する。同年、スイスの批評家 Albert Béguin とフランスの詩人 Pierre Emmanuel がケベックを訪れる。エベールは彼らと知り合い、その後、エベールがパリを訪れたときに、彼らを介してスイユ社に紹介され、これが彼女ののちの作家人

生にとって重要な意味をもつことになる。

1954年、カナダ王立協会⁷⁾の奨学金でパリに遊学し、57年まで滞在する。その間にスイユ社から、次の作品を無条件で出版する権利を得る。

1957年にいったんモンREALに戻り、1958年には長編小説『木の部屋』をこのスイユ社から出版。1960年には同社から『詩集』を出版し、1961年、この詩集により、カナダの文学賞としてはもっとも権威ある総督文学賞を受賞する。しかし、それでもまだ、ペン1本で生計を立てることは容易ではない。1960年に父親が亡くなると、フランスとケベックの間を往復するようになり、さらに1965年に母親が亡くなると、パリに定住することになる。

状況が一転するのは、1970年、2冊目の小説『カムラスカ』を発表してからである。後述するように19世紀半ばにこの土地で実際に起きた殺人事件に取材したこの小説は、わずか数か月で10万部を売るベストセラーとなり、フランス書店賞(Prix des Libraires de France)を受賞する。

1975年には3冊目の小説『魔宴の子供たち』を出版し、ふたたび総督文学賞を受賞。翌年にはアカデミー・フランセーズ賞も受賞する。1982年、5冊目の小説『シロカツオドリ』でフランスの5大文学賞の1つであるフェミナ賞を受賞する⁸⁾。これにより、ようやく経済的不安から解放される。

1988年には、国際ペンクラブのカナダフランス語センターによりノーベル賞候補にも挙げられる。1997年、32年間住んだパリからモンREALに戻り、1999年、最後の作品となる『光の服』を出版して、2000年1月22日、83歳で生涯を閉じる。

以上がアンヌ・エベールの略歴である。彼女はいわば20世紀のケベックを丸々生きた作家である(実際には、「ケベックとフランスの間で生きた」と言った方が正確だが)。彼女が生きた時代は、第2次世界大戦後、「静かな革命」と呼ばれる60年代ケベックの急速な近代化の時期を経て、77年の「フランス語憲章⁹⁾」や80年と95年に行われた2度の州民投票¹⁰⁾、そして90年代の間文化的な流れなどを経験しながらケベック社会が大きく変化し、成熟していった時期とぴったり重なる。

家柄や環境にも恵まれ、幼い頃から本に親しんで育ったエベールは若くして作家を志すようになるが、彼女が執筆活動を始めた1940年代、50年代の北米フランス語圏の状況は厳しいものだった。人口、識字率のどちらから見ても読者数が限られていたし、カトリックの色彩が強いので表現上の制約も多く、作家として身を立てることは簡単ではなかったのである。フランス系カナダは、1759年にアブラム平原(ケベック市)で繰り広げられた英仏の戦いに本国が援軍を送ってくれなかったために自分たちの敗北が決定的なものになってしまったとして、長い間、フランスにたいして恨みの混じった複雑な感情を抱き続けることになる。にもかかわらず、20世紀前半というのはまだ、言語的にも、文化的にもフランスを参照することの多い時期だった。エベールは、自著をフランスの出版社から出版できたほとんど最初の作家の1人である。Alain Roy(2014)も指摘しているように、エベールは最初の詩集や小説をケベックで自費出版せざるをえなかったが、

その後、パリのスイコ社から出版できるようになったことで、逆にケベックでの評価も格段に高まった。では、実際に彼女はどんな作品を手掛けたのだろうか。そこに描かれた女性像を中心に見ていきたい。

3. 『王たちの墓』

まず1953年、彼女が37歳のときに発表した詩集『王たちの墓』から、同題の詩の一部を読んでみたい。「王たち」というのは、古代エジプトのファラオたちのことで、「わたし」が彼らの墓に降りていく場面が描かれている。

(…)

横臥する者たちにたいする不動の欲望がわたしを射貫く。
わたしは驚きながら眺めるのだ
黒ずんだ骨にじかに象嵌された
青い宝石が光るのを。

(…)

わたしの放心した顔に覆いかぶさる黄金の仮面
瞳の代わりに紫の花々、
かすかな愛が短い正確な線でわたしに化粧をほどこす、
そしてわたしが握りしめているこの鳥は
呼吸し
風変わりなうめき声をあげる。

木から木へと吹き渡る風にも似た
長い戦慄が
蔽かできらびやかな棺におさめられ
黒檀と化した7人の偉大なファラオたちを揺り動かす。

それは執拗に存続する死の深みにすぎない、
犠牲にされた肉体のまわりで
空しい遊戯にすぎないのに
腕輪をカチャカチャと鳴らしながら
最後の苦悶を真似、
安らぎと

永遠を探し求めている。

わたしの内なる悪を漥えた泉に飢えた彼らは
わたしを横たえ、わたしの泉から水を飲む。
7度、わたしは骨に万力を感じる
そしてわたしの心臓を探し当て、引きちぎろうとするひからびた手を。

おぞましい夢想到に満腹して青ざめたわたしは
今や手足をほどかされている、
死者たちは暗殺されて、わたしの外にいる、
どんな夜明けの光線がここをさまよっているのだろう？
いったいなぜこの鳥は
震えながら、つぶれた瞳を
朝のほうに向けるのだろう？ (Hébert, 2013a, p. 273-275)

王たちは「不動の欲望」をたずさえたまま、死してなお生き続けている。彼らはきらびやかな宝石を象嵌され、空しい腕輪をはめられて、何千年の年月を経てもなお、この世の栄華に執着している。エベールはなぜここでファラオの姿を描いたのだろうか。古代エジプトの王たちと放心した「わたし」の関係を、どのように考えたらよいのだろうか。

Nathalie Watteyne (2013, p. 107) がいみじくも指摘しているように、この詩は政治的、宗教的エリートたちによる束縛と支配の隠喩として解釈することが可能である。それを、古代エジプトの王たちの姿を借りて隠喩的に表現しているところに、直截的な告発が困難だった当時の時代状況、またエベールの詩人としての戦略が感じられる。ファラオは世界にたいして閉じられ、従属しているフランス系カナダの象徴であり、「わたし」は1人の女性としても、また集団としても、そのようなものを断ち切るために、勇敢に墓に降りていかなければならない。

地獄下りの主題はダンテ以来、多くの作家たちによって繰り返されてきたものだが、エベールもまた、この神話的テーマを借りながら、強大な権力をほしいままにしたファラオたちが眠る夜の世界に降りていき、彼らを「暗殺」し、解放されて夜明けを迎える「わたし」を描く。しかし、最終ストロフの「どんな夜明けの光線がここをさまよっているのだろう？」という疑問文は暗示的だ。その夜明けはまだきわめて曖昧なものといわざるをえないのだから。

4. 『激流』

次に、少し時代を遡って1950年に発表された『激流』という中編小説集の中から同題の作品を読んでみたい。この作品は当時のケベック社会にとってはあまりに過激だと見なされ、出版社

が見つからずに、結局自費出版するまで5年もかかったものである (Watteyne, 2008, p. 21; Hébert, 2015b, p. 645 参照)。その後 1963 年ようやく、2 篇の中編小説を加えて 7 篇で HMH 社から出版され、1965 年にはパリのスイコ社からも出版されて、60 年代以降は批評が絶えなくなる。このあたりにも、60 年代の「静かな革命」を境にしたケベック社会の劇的な変化を読み取ることができる¹¹⁾。

『激流』は、厳しい母親のせいで「世界を奪われた」フランソワの物語である。クローディーヌは婚外の妊娠をしたために村を離れざるをえず、森の中で息子のフランソワとひっそりと暮らしている。彼女は息子を聖職者にすることで罪を贖おうと企てている。フランソワは 12 歳になるまで人の顔をよく見たことがなかった。母親の顔すら怖くてまともに見ることができなかったのだ。しかし、次第に、人間 (男の人) の顔を間近に見たいという好奇心が芽生え、ある日、通りまで出てみるのだが、人の気配はない。ところが突然溝で何かにつまずき、見ると、それは泥まみれで恐ろしい形相をした人間だった。彼はフランソワに話しかけてくるが、そこに母親が現れ、家に連れ戻される。母は「世界は美しいんだよ、フランソワ、触れてはいけない (Hébert, 2015b, p. 660)」といて彼を叩くのだが、フランソワにとってそれは、初めて他人を見た、新鮮で興奮する体験だった。

その後寄宿学校に入り、母の期待通りに多くの賞を獲得するが、何の喜びも感じられない。そればかりか、母を憎んでいることに気づき、17 歳になったとき、彼を^{セミネール}神学校に入れようとする母の意に背く。彼は母親に鍵束で頭を叩かれ、聾となるが、その時から自分の内部に「激流」が流れているのが聞こえるようになる。

そのころ、家に荒馬がやってくる。ある日、その綱が故意なのか、偶然なのか解かれ、母は血だらけになって死ぬ。1 人になったフランソワは母の抑圧から解放され、やがて異性への欲望を感じるようになって、探しに出かける。道端に古道具を売る行商人がいて、その娘と思しき者がフランソワに笑いかけてくる。彼はこの女を「買い」、アミカと名付け、自宅に連れ帰る。彼は彼女のずる賢くそうなところが気に入ったのだが、彼女が彼の首に腕を巻き付けてくると、「どんな冷たい爬虫類がぼくにまとわりついてくるのだろうか? (Hébert, 2015b, p. 675)」と自問する。母の軛を逃れたと思ったら、今度はアミカにつながれている自分を見出すのである。

しかし、ある朝フランソワが起きてみると、アミカは姿を消していて、家の中は荒らされていた。母がすべてを記録していた「勘定帳」が出てきて、その最後のページには「悪の金は清算済み」と書かれている。フランソワの頭の中を駆け巡っていた怒涛も、もうほとんど聞こえなくなっている。そして、アミカの頭が水に浮いているのを発見する…。

この作品は、単なる母と息子の異常な関係としては片づけられない、様々な角度からの分析の可能性をはらんでいる。この 1 人称小説の語り手はフランソワなので、母親はいわば脇役だが、彼女が体現しているものは象徴的である。彼女はカトリックの教えを内化し、みずからの贖罪のために息子の人生をほしいままにする。小畑精和も指摘するように、子供の教育に熱心にたずさわる母親は伝統の守り役でもある (2003, p. 179)。彼女は「おまえは私の息子だよ、私の後に続

くんだ」という言葉を何度も繰り返す。そこから解放されようとして抵抗した息子は、まるで彼の気持ちを理解したかのような荒馬によって母親から解放され、これで人生をやり直せるかと思いきや、結局、今度は自分が「所有」しようとして「買った」アミカに逆に「所有」されていることに気づく。

フランソワの人生に闖入してきたアミカとはいったい何者だったのだろう。彼女は、「悪魔」、「魔女」、「私の人生の証人」など、さまざまな呼び名で呼ばれるが、ただの物取りのようでもあり、人里離れた家であったと思しき事故（あるいは事件）を探りにやって来た偵察者のようでもあり、しかし、最後の場面を見ると、結局彼女自身も物取りの犠牲者だったようにも見える。

この小説では、カトリックと結びついた父権的な力を母親が代弁し、息子がその犠牲になるという、いわばジェンダー的には転倒した配置になっているが、結果的に、母の後に登場して主人公を「所有した」アミカは、じつは主人公を母親の呪縛から、つぎに主人公にとりついた「激流」（言語化できない内面の嵐のようなもの）から彼を解き放ちに来た解放者なのかもしれない。その意味では、「静かな革命」以前のケベック社会はジェンダー的視点からだけでは説明できず、男女ともに「囚われの身」だったとも言えよう。

5. 『木の部屋』

「静かな革命」前夜の1958年に『木の部屋』が出版される。先述したように、エベールは『激流』を出版したあと、1954年からカナダ王立協会の奨学金でフランスに遊学しており、その滞在は当初の予定を大幅に超えて3年に及ぶことになる。『木の部屋』はその滞在中に交渉が成立したパリのスイコ社から上梓された。

主人公のカトリーヌはごくつましい階級の娘である。母に死なれ、何もできない高齢の父親に代わって、3人の妹がいる家庭を切り盛りしているが、子供の頃に森ですれ違ったことのある領主の息子ミシェル（彼はピアニストを目指している）に見初められ、身分違いの結婚をする。ところが、領主の館は姉のリアとその恋人に占拠され、ミシェルとカトリーヌは追い出されて、パリの小さなアパートマンに引っ越す。音楽のシーズンに姉弟が使っている板張りで防音装置が施された部屋で、これが作品のタイトルになっている。

ミシェルは妻を、日本風に言うなら「床の間に飾っておく」。彼女に主婦らしいことは一切させようとしな。家事などは女中がするもので、愛する妻にさせるものではない、というのが彼の持論なのだ¹²⁾。結婚前、父親や妹たちの面倒を見ることに生き甲斐を感じていたカトリーヌにとって、何もしないこと以上の苦痛はない。「わたしは水たまりの中を素足で、息が切れるほど走りたい（Hébert, 2013b, p. 108）」と願いながら、狭いアパートマンの中に閉じ込められ、無為の生活を送りながら蒼白く痩せていくのだが、それでも、理想の妻になろうと努力しつづける。

しかし、その努力もやがて限界を迎え、病を得て、医者のお勧めで南仏と思しき海辺に転地療養しに行くことになる。そこで、ようやく健康を取り戻すと、ミシェルとは対照的なブリュノーに

求婚される。彼女は彼から自分の人生を自分で決める勇気を学び、ミシェルに別れを告げるためにアパートマンに戻ってくる。作品の最後に訪れる晴れ晴れとした、静謐な雰囲気が印象的な作品である。

貧しい家庭に育った娘にとって、貧困から抜け出すための唯一の方法は結婚だった。ところが夢を追いかけて現実を知らない若い娘は、先に何が待ち受けているか見通すことができない。たとえ現実に気づき始めても、状況を打開する力がない。心身の不調という存在の危機的状況を経験してようやく現実を直視する力、自分の意志を獲得し、幸福を手に入れる、というストーリーは、ガブリエル・ロワ（Gabrielle Roy, 1909-1983）を一躍有名にした小説『束の間の幸福』（1945年）とも類似している。ケベックの女性作家たちは、「静かな革命」が始まる前から、文学を通して「人間存在の解放」というテーマに取り組んでいたと言える。

一方、フランスも、大革命によって王権を倒し、政教分離した国であるとはいえ、社会的に見ると20世紀に至るまでカトリックの色彩の強い伝統的な国だった。女性解放運動が具体的に実を結んだのはけっして早くなく、68年の5月革命以降だった¹³⁾。とはいえ、フェミニズムのバイブルといってもよいシモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』が刊行されたのは49年だから、エベールはそれから間もなくのパリに滞在していたことになる。いわば、外の状況を知り、外から自国を見つめられたことが、女性解放、ひいてはケベック社会全体の解放のメッセージを、文学を通して発することを可能にした、という面は否定できないだろう。

6. 『カムラスカ』

最後に、1970年に発表された『カムラスカ』を取り上げたい。本作品は邦訳が存在するエベールの数少ない作品の1つだが、エベールの母方の祖父¹⁴⁾が領主をしていた土地で1839年に実際に起きた殺人事件に取材したものである。舞台そのものは1世紀以上前のケベックの一地方だが、出版当時フランスで流行していたヌーヴォーロマンの色彩が濃く、過去・現在・未来を自由に行き来する映画的手法が特徴的な作品である。主人公エリザベットの頭の中を去来するさまざまなシーンが時系列的統一性なしに断片的につづられた小説は、読者にとってはけっして読みやすいとはいえないのだが、出版後数か月で10万部が売れるベストセラーになった。カムラスカという、一度聞いたら忘れられない地名は、先住民アルゴンキンの言葉で「イグサが生い茂る水辺」を意味する。ケベック市からサンローラン河を170キロほど下ったところであり、19世紀にはカナダの主要な保養地にもなった場所で、映画¹⁵⁾にも出てくるウナギの養殖が今も行われている。

主人公のエリザベットは、16歳で恋を知らぬままにカムラスカ領主アントワーヌ・タシのもとに嫁いでくる。広大な領地をもつ夫との結婚は良縁と思われたが、まもなくこの夫が自殺願望をもち、妻を道連れに心中を図ろうとしていることを知る。ほかにもさまざまな奇行や暴力にさらされ、病に臥せりがちになった彼女に紹介されたのが、夫の元同級生であるアメリカ人医師ネルソン¹⁶⁾だった。2人は互いに惹かれ合うようになり、一緒にアントワーヌ殺害計画を企てる。彼

に手を下したネルソンは国境に逃げ、エリザベットだけが出廷させられるが、体面を気にする姑の計らいで告訴は取り下げられ、現在は名誉を救ってくれた公証人のロランと再婚して、高齢の彼の介護をしながら貞淑な妻を演じている。死期迫る夫の看病をしながら仮眠中に彼女の脳裏を去来するさまざまなシーンが小説を構成している¹⁷⁾。

いささかフロベールの『ボヴァリー夫人』にも似た、新聞の三面記事に取材したスキャンダラスな物語と見えるものを通してわれわれが知ることができるのは、カトリックの教えにより離婚を認められていなかった長い時代、結婚制度の中で囚われの身となった女性は、身の危険を感じても実家に避難することしかできず、泥酔した夫が300キロ離れたその実家まで追いかけてくるような状況を打開するには「殺人」しかなかった、という重い事実である。

Lori Saint-Martin (2008, p. 111) も指摘しているように、エベールの作品ではしばしば「殺人」が行われる。『激流』における母の死についてはあいまいな点が残るとしても、『王たちの墓』や『カムラスカ』においては、男女とも、殺人による以外に自分を抑圧しているものからの解放はあり得ないような絶望的な状況下で、それは行われる。一方、『木の部屋』では、カトリーヌはミシエルを殺害することなしに「解放」され、自分の意志で人生を切り拓いていくことを学ぶ。このあたりに、エベールが外からケベック社会を眺められるようになったことの成果があり、また、ケベック社会そのものの変化の兆しもうかがえるのだろう。

エベールは60年代から90年代という、まさにケベック社会が目まぐるしく変化していった時期の大半をフランスで過ごした。そんな彼女について「ほんとうにケベック社会を見ていたのか、肌で感じていたのか」という人もいるかもしれない。しかしこの時代にパリという、世界の文化が交差する都市で、さまざまな影響を受けながら、故郷に思いを馳せていたからこそ見えたものも多いはずだ。エベールの作品は、派手な政治的パフォーマンスとは異なる次元で、人々に社会や性^{ジェンダー}の在り方を考えさせてくれる。

7. おわりに

以上、20世紀ケベック文学を代表する女性作家アンヌ・エベールの生誕100周年にちなんで、彼女の主要作品のいくつかを振り返ってみた。ケベック社会では、英系による支配の中で仏系が「生き残る」ための戦略として、カトリックの伝統的価値観の強い時代が長らく続いた。それは社会全体に影響力を及ぼしていたが、とりわけ女性にたいしては抑圧的に働いていた。しかし現在は一転して、生粋のケベコワも、後からやってきた移民たちも、男女ともに多様な価値観の中で各人が自己実現しようとする間文化的な社会^{アンテルキョルチュレル}が成熟してきている点を強調しておきたい。アジア系も含めて、さまざまな出自をもつ作家たちの活躍もめざましい。

とはいえ、そのような現在の社会は自然に生まれたわけではなく、そうでなかった長い時代を人々が思い出すことから意識的に勝ち取られてきたものである。女性の解放ということだけで見れば、ケベックはフランス以上に隣国アメリカ合衆国の影響を強く受けており、マリー＝クレール

ル・ブレ (Marie-Claire Blais, 1939-) やニコル・ブロッサル (Nicole Brossard, 1943-) のように文学作品の中でフェミニズム的言説を展開する作家も多いし、また、フェミニズム理論で批評する論者たちも数知れない。しかし、エベールはそのようなタイプの作家より少し前の世代に属する作家であり、生まれた時代からも、家柄からも、1960年代の「静かな革命」以前の伝統的な(貴族)社会を体現しながら、しかしそれに抗った作家といえよう。いわば、古い価値観と、予感される新しい価値観の間で揺れ動く女性の内面を、フィクションを通して、想像力を駆使しながら掘り下げていった作家なのである。

注

- 1) Ancrenat, A., Boisclair, I., Randall, M., Saint-Martin, L. などが数多く手掛けている。
- 2) 6月にはシェルブルック大学アンヌ・エベール研究センター主催、モンレアルの州立図書館・古文書館共催の国際コロクが3日間にわたって開催された。
- 3) 本論考は、2016年10月に日本ケベック学会全国大会において行われたシンポジウム「ケベック社会と女性」での報告を改稿したものである。シンポジウム全体の要約は、飯笹佐代子他(2017)を参照されたい。
- 4) 以下の記述は主として Watteyne (2008) を参照している。
- 5) カナダ大西洋沿岸に住んでいたフランス系カナダ人だが、ケベック人とは異なる歴史・文化的アイデンティティをもつ。18世紀中葉、英国が彼らに忠誠を誓うよう強要したが拒否したために、住居が焼き払われ、土地を没収されて強制移送させられた。ロングフェローの『エヴァンジェリン』はそのために引き離された恋人たちの悲しい運命をうたった長詩。
- 6) Prix David. 別名「ケベック州賞 (Prix de la Province de Québec)」。
- 7) Société royale du Canada, 1882年設立、カナダの科学・芸術アカデミー。
- 8) フランスの5大文学賞を受賞した4人目のフランス系カナダ人で2人目のケベック人である。
- 9) ケベック州においてフランス語の地位を向上させ、その質を改善することを目的としてケベック党政権が制定した、ケベック州の公用語をフランス語のみとする憲章(101号法)(小倉、2009参照)。学校教育や経済活動等におけるフランス語使用を事細かに定めている。詳細は以下を参照のこと。
<http://legisquebec.gouv.qc.ca/fr/pdf/cs/C-11.pdf> (フランス語版), <http://legisquebec.gouv.qc.ca/en/pdf/cs/C-11.pdf> (英語版) (2017年8月1日アクセス)
- 10) ケベックの主権構想を問うもの。2度目は、50.6%対49.4%(投票率93%)という僅差で否決された。
- 11) 2012年には Simon Lavoie 監督によって映画化もされ、今世紀にはいってもなお、解釈しなおされ、鑑賞しつづけている。
- 12) 「彼はカトリーヌが、雨に降られたこの世の白くておとなしい雌猫のように静かにしていることを願った。」(Hébert, 2013b, p. 110)
- 13) 女性参政権が認められたのは1944年、ニューウィルト法により避妊が合法化されたのは1967年だが、協議離婚が可能になったのは1975年、人工妊娠中絶が最終的に合法化されたのは1979年である。
- 14) Achille Taché.

- 15) 1973年に Claude Jutra によって映画化されている。
 16) 米独立戦争後にカナダに逃れてきたロイヤリストの子孫という設定。
 17) この作品については、小倉（2009）も参照せよ。

参考文献

- Beauvoir, S. de (1949). *Le deuxième sexe*, Paris: Gallimard.
 Hébert, A. (1942). *Les Songes en équilibre*, Montréal: Éditions de l'Arbre.
 Hébert, A. (1950). *Le Torrent*, Montréal: Éditions Beauchemin.
 Hébert, A. (1953). *Le Tombeau des rois*, Québec: Institut littéraire du Québec.
 Hébert, A. (1958). *Les chambres de bois*, Paris: Seuil.
 Hébert, A. (1960). *Poèmes*, Paris: Seuil.
 Hébert, A. (1963). *Le Torrent; suivi de deux nouvelles inédites*, Montréal: Éditions HMH.
 Hébert, A. (1965). *Le Torrent*, Paris: Seuil.
 Hébert, A. (1970). *Kamouraska*, Paris: Seuil. [邦訳: エベール, A. (1976) 『顔の上の霧の味』(朝吹由紀子訳) 講談社]
 Hébert, A. (1975). *Les Enfants du sabbat*, Paris: Seuil.
 Hébert, A. (1982). *Les Fous de Bassan*, Paris: Seuil.
 Hébert, A. (1999). *Un habit de lumière*, Paris: Seuil.
 Hébert, A. (2002). *Le Torrent*, Montréal: Éditions Beauchemin.
 Hébert, A. (2013a). *Œuvres complètes d'Anne Hébert*, I. Poésie, Montréal: Les Presses de l'Université de Montréal.
 Hébert, A. (2013b). *Œuvres complètes d'Anne Hébert*, II. Romans (1958-1970), Montréal: Les Presses de l'Université de Montréal.
 Hébert, A. (2014). *Œuvres complètes d'Anne Hébert*, III. Romans (1975-1982) Montréal: Les Presses de l'Université de Montréal.
 Hébert, A. (2015a). *Œuvres complètes d'Anne Hébert*, IV. Romans (1988-1999) Montréal: Les Presses de l'Université de Montréal.
 Hébert, A. (2015b). *Œuvres complètes d'Anne Hébert*, V. Théâtre, nouvelles et proses diverses, Montréal: Les Presses de l'Université de Montréal.
 飯笹佐代子他 (2017) 「ケベック社会と女性」『ケベック研究』9, 126-138.
 小畑精和 (2003) 『ケベック文学研究』 御茶の水書房。
 小倉和子 (2009) 「ケベック文学への誘い—多様性にかされるフランス語—」『ことば・文化・コミュニケーション』1, 181-192.
 Roy, A. (2014). La littérature québécoise est-elle exportable? *L'inconvénient: littérature, art et société*, printemps, 56.
 Roy, G. (1945). *Bonheur d'occasion*, Montréal: Société des éditions Pascal.
 Saint-Martin, L. (2008). Femmes et hommes, victimes ou bourreaux? Violence, sexe et genre dans l'œuvre d'Anne Hébert, *Les Cahiers Anne Hébert*, 8.
 Watteyne, N. (sous la supervision de) (2008). *Anne Hébert, chronologie et bibliographie*, Montréal: Les Presses de l'Université de Montréal.

Watteyne, N. (2013). 「ケベック詩の誕生」 (小倉和子 訳) 『ことば・文化・コミュニケーション』
5, 99-112.